



## 大学附属図書館の未来

金沢大学附属図書館は、平成21年12月に「基本理念と目標」を定めました。そこでは、本学が位置する加賀金沢の地にオマージュ (homage) を捧げた後、図書館がなそうとすることを次のように宣言しています。

金沢大学附属図書館の使命は、金沢大学憲章に謳われた「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」という本学の理念を支え、「卓越した知の創造」と学生の「自学自習」を促進するために、学術情報資源の収集、整理、保存、発信に力を注ぐとともに、一冊の本、一人の利用者たりともおろそかにしない万全のサービスを具体化することに他なりません。

それから約2年、私たちはここに掲げた理念と目標を実現すべく様々な活動に取り組んで来ました。中央図書館におけるラーニング・コモンズの開設、ブックラウンジへのカフェの誘致と各種イベントの開催、北陸銀行文庫の受け入れ、明後日朝顔プロジェクトを通じた地域住民との交流、年2回のブックリユース市の開始、そして念願であった医学系分館の増改築を控えたいま、自然科学系図書館では、日産自動車のゼロ・エミッション活動との連携を得た環境学コレクションの蒐集がますます充実されつつあります。

しかし、これらの活動はこの『概要』の数字から読み取れるでしょうか？ 逆に言えば、図書館の理念を実現する上では『概要』に表れる数字を改善するだけで十分であって、このような活動は本当に必要なのでしょうか？

理念を睨んで私たちがなりふり構わずもがいているのは、実は大学図書館の未来がよく見えないからです。将来に希望と同時に不安を感じるからでもあります。大学図書館はいま、電子化や少子化やニーズの分散多様化のなかで、自分の適正な規模や機能を測りかねているのが現状です。

私は、『概要』からはまだ見えてこない近未来の図書館の生きる道を、次の3つの姿に想像しています。

- (1) 図書館（員）がもっと深く大学の教育機能を担うようになること
- (2) 「ここにしかない」といったオンリーワンのコレクションを持ち、それを社会に広く利用してもらうこと
- (3) 距離的に遠くなりすぎない広領域の他大学図書館や、近隣領域の公立図書館との連携をベースに、強力で使いやすい、学術情報のしなやかなネットワークを構築すること

その姿がおぼろげにでも『概要』の数字から透けて見えてくるようになるまで、私たちはもう少し悪戦苦闘を続けなければならないのだと思います。

附属図書館長 柴田正良